俺のことはお兄ちゃんと呼べ!!

森林樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺のことはお兄ちゃんと呼べ！！

【Ｎコード】
Ｎ２３３５Ｙ

【作者名】
森林樹

【あらすじ】
予知能力者の妹の予知通り、朝目が覚めると異世界にいた俺。帰ることができるかもわからないが、わからないなりに頑張る。まぁ、異世界って言っても生きてぶんにはなんとでもなるだろうし、問題はこの世界には妹がいないことだ。ああ、わが妹よ。お前に会えないなんてお兄ちゃんさびしくて死にそうだ。せめて誰か、俺をお兄ちゃんと呼んで慰めてくれ！もう誰も俺のことをお兄ちゃんとよんでくれないなんてそんなの考えられない！誰か、俺のことをお兄ちゃんと呼べ！！

※この作品はアルカディアにも投稿しています。

1話

類は友を呼ぶ。
同じような人間の周りには、同じような人間が自然と集まるものだ。
これは別に友人知人の間柄だけにはおさまらない。
血縁関係であれば、多かれ少なかれ誰しも似ているところがあるものだ。
それはもう、嫌が応にも。

俺の家族は、変な奴らばかりだった。
変というべきか、人間を止めているというべきか。

年齢順にあげるなら、筆頭はやはりうちの爺さんである。
９０歳を超える年寄りながら、その肉体は老いを一切見せない。
筋骨隆々としておりボディービルダーも真っ青な肉体をしている。
空手に柔道、合気道を習得しているらしく、それらを組み合わせた武術を扱う武術家だ。
もはや我流と呼ぶべきか、様々なものが合わさった複流と呼ぶべきかわからない。
その拳は瓦どころか、コンクリートの壁を貫通させる。
粉砕ではない、貫通だ。
戦時中は武器を一切使わずに、敵兵を素手で全て倒したらしい。
爺さんの部屋には、その時の戦いの戦果を称える勲章が飾られている。
体中に銃痕があり、あきらかに心臓の上にも傷がある。
本人曰く、瞬時に気で肉体を強化していたからどれも貫通することはなかったとのこと。

傷は残ったが、どれも死にいたる傷ではなかったらしい。
もはやその身一つで人間を止めているとしか思えない。
正直、爺さんが自称する「人類最強」は本当だと思う。

次にあげるのは、うちの父さんか。
この人は未だに何の仕事をしているのかわからない。
家にいる時はのんびり茶を飲んでいる大人しいひとである。
おそらくは家族の中で一番大人しい。
だが、俺はこの人が走っているのを見たことがない。
歩いてばかりで走らないのではない。
あまりに走る速度が速すぎて、肉眼でとらえることができないのだ。
いろいろあって、家に謎の武装集団が襲撃してきたことがあった。
その時も、気がついたらその集団は全員が父の手によって地面に上半身を埋めて不細工な逆立ちをしていた。
総勢３０名はいようという集団が、一瞬で全員、犬神家のポーズをしているのだ。
俺は途中の過程を見ていない。
目の前を一瞬風が過ぎたかと思うと、次の瞬間にはその光景が広がっていたのだ。
正直、父が自称する「地上最速」は本当だと思う。

その次は母さんである。
職業はどこにでもいる専業主婦だ。
だが口から火を吹く。
聖子ちゃんカットの髪型で、かっぽう着をよく着ている。
主婦の名は伊達ではなく、我が家で一番の料理上手だ。
その腕前はご近所でも評判で、頼みこまれてたまに料理教室の助手をしていることもある。
だが口から火を吹く。
若いころは女子アナウンサーを目指していたらしく、大学のミスキ

ャンパスにも選ばれたこともあるという。
確かに母は身内びいきもあるかもしれないが、５０歳を超えているとは思えないほど若々しくて美人だとは思う。
だが……何故か口から火を吹けるのだ。

家族で最後に残っているのは俺の自慢の妹。
今年高校にあがった１６歳。
外見はもう可愛い。むちゃくちゃ可愛い。
細くさらさらとした髪の毛は一本一本が艶のある黒髪だ。
まさに烏の濡れ羽色という言葉は俺の妹の髪のためにある言葉といっても過言ではないだろう。
目は光彩のない死んだような目をしているが、大きくくりくりとしていて愛らしい。
小さな唇はリップクリームを塗らなくても潤っている。
その可憐な唇が「お兄ちゃん」と呼ぶだけで俺の心に喜びを与えてくれる。
時折、その可憐な唇が俺のことを「変態」と呼ぶが、それもまたギャップがあって非常にいい。
同年代の女の子たちよりも華奢で、発育もあまりよくはないがまだまだ未来に期待だな。
むしろ兄としてはあまり早く大人っぽくなられては切ないものがあるので今のままでいてくれると大変うれしい。
最近は年相応に大人の女性に憧れているようでちょっと心配である。
まだ女子高生には早いと思われる下着を所有しているのを見つけた時は兄として説教したものだ。
しかしいつのまにか下着を勝手に漁って確認した俺が説教されていたのはどういうことか。
いやぁ、いつのまにか兄に説教できるほどに成長していたということだ。
そういう精神面での成長は喜ばしいことである。

身体能力は爺さんや父さんと違っていたって普通。
だが、そんな彼女は予知能力者だ。
昔からその能力を買われ、政治家から芸能人まで知る人ぞ知る存在である。
あまり遠い未来は見ることができないまでも、その的中率は１００％と我が妹ながら恐ろしい。
何を隠そう、過去にあった襲撃事件などもほとんどが妹を狙ったものである。
単純にその的中率１００％な預言を恐れたり、その力を欲したり。
理由は様々だが拉致されそうになったり殺されそうになったりしていた。
まぁ、そんな事件もすべて予知能力で最初からわかっていた。
当然、襲撃者はすべて家の家族によって見るも無残な姿に変わっている。

まぁ、何を言いたいかというとだ。
俺は妹が大好きである……ということではない。
いや、大好きだけどな。お兄ちゃんとか言われると嬉しいけどな。
そんな家庭環境で育った俺が、俺だけが普通でいるわけがないと言いたいのだ。
類は友を呼ぶ。
蛙の子は蛙……いい意味でも悪い意味でも。
もはや俺が世間一般で言う普通でない人間であるのは確定事項みたいなもんだったのだろう。

爺さんほどじゃないが、俺は強靭な肉体を持っている。
爺さん直々に修行と言う名のしごきを受けた俺は、武術もそれなりにこなせる。
未だに自分の扱う武術がなんと呼ぶべきかわからないが。

爺さん曰く「わし流武術」らしい。
日常的に襲撃される日々だったので、強くなるのは必然だった。
それに父さんほどじゃないが、俺は素早く動ける。
母さんのように口から火が……吹けない。
それはできないけど、何故かちょっと安心する。
妹のような予知能力もない。
でも最近は気を覚えて、漫画なんかに出てくる戦闘歩法ができるようになった。
足の裏に集めた気を爆発させて、その推進力で一気に移動するアレである。
このおかげで、一気に距離をつめることもできるようになった。
そう、気だ。
この気を覚えてから、家族の中で俺専用の能力が発現した。
【治癒能力】である。
全身の気を高めることによって、高速で傷を癒す。
それはまるでビデオの逆再生のようだ。
爺さんとの試合中、興が乗りすぎた爺さんの一撃でちぎれてしまった俺の指。
それが綺麗にくっついたのだから、もはやありえないレベルとしか言えない。
その治癒対象は傷だけでなく病気も癒すことができ、何より触れることで他人のそれを癒すこともできる。
この能力に発現してからは、妹だけでなく俺も拉致の対象として狙われるようになった。
人外魔境の環境で育った俺も、立派な人外だというわけだ。
あっ、人外魔境っていっても妹は違うから。
妹は人外じゃないから。
あくまで爺さんと両親、おまけで俺があてはまるってだけだから。
まぁ天使のように可愛らしいという意味では人外かもしれないけどな。

「お兄ちゃん」

「どうした？我が妹よ」

「お兄ちゃん、明日どこかに消えちゃうみたいだよ」

そんなある日、妹が就寝前にわざわざ俺の部屋を訪ねてきてそう言った。
あの予知能力者である妹が。
的中率１００％の妹が。
【俺がどこかに消える】という予言を口にした。
だから、俺はまたどこぞの組織が俺を明日、拉致しようとしてくるのかと勘違いした。
今までにも何度もあったことだ。
今回も返りうちにしてくれる……そう息巻いている爺さんと両親、そして俺。
だが、俺たちは肝心なところを間違えていた。
妹は【消える】と言ったのである。
今までのように【拉致されそうになる】と言ったのではない。
そこのところの違いに気がつかなかった。

「消えるって……神隠しとかそっち系の意味かよ」

必然的な運命として、俺は妹の予知通り家から姿を消したのだろう。
布団に入って、目覚めてみれば見知らぬ場所。
拉致られたのかと思ったが、どう見てもどっかの秘密基地とかにも見えない。
そもそも監禁されているわけでもなく、地面にねっ転がっていた。
見知らぬ風景が、ここが俺の知らない場所だと告げている。

「せめて日本のどこかだとありがたいんだけど……」

目の前に広がるのはだだっ広い草原。
その向こうに見えるのは牧歌的なまるでヨーロッパの風景のような山々。
そして、遠くの空を飛行しているのは翼の生えたトカゲ。

「日本どころか……地球ですらないんだろうなぁ……」

俺の口から、諦めのため息が漏れた。
なんとなく漠然と、この場所が元々いた世界と全く別の場所だと理解してしまっていた。
どうしよう、これじゃ妹に会えないじゃないか。

2話

だだっ広い草原にいつまでも突っ立っているわけにもいかない。
できれば人のいる場所に行きたいが、かといってそれがどの方角にあるのかもわからない。
そもそもどっちが北であるかも解らない。
それだけならまだいい。
下手したら人間か、それに準ずる知的生物がいない可能性だってある。

「……深く考えるだけ無駄だな」

どうせいくら考えたところで、ここから動かなければ答えなど得られない問題だ。
とりあえず俺はさっきのドラゴンもどきが飛んで行った方角に向かうことにした。
その方向に集落があるとも限らない。
単に巣に帰っただけで、その方角はより危険かもしれない。
だけど、まぁ襲われたら襲われたでなんとかなる気もしたのだ。
自信過剰だとは思うけど、要は羽が生えたトカゲだしなぁ……
大きさはありえないくらいにでかかったけど、トカゲならよく山籠りの修行で食った。
まぁ、おやつ代わりに食ったトカゲとドラゴンを一緒にするのはよくないと思うけど。

「あれは……道か」

歩き始めて数時間。
目の前に道らしきものが横切っているのが見えた。
別に特にコンクリートや石で舗装されているわけではない。
いうなれば、長年で踏み固められて自然と道になったといったところか。
その道は草原の他の場所と違い、土が露出して草があまり生えていない。
よく見れば、ところどころ人の足跡や馬らしき生き物の蹄の跡が見える。
少なくとも人間か、それに準ずる存在はいると見てよさそうだ。
どっちが近いかはわからないけど、どうせこの道をたどれば人里に出るだろう。
一瞬迷うも、俺は右へ行くことにした。
右を選んだことに特に意味はない。
言うなれば、ただの勘である。
直感的に、こっちのほうが人がいそうな気がする！と思ったのだ。

そうして再び歩き出して一時間ほど。
正確な時間はわからないから、腹の減り具合からの体内時計での計算だけど。
だってなぁ、寝て起きたらこの場所だぜ？
つまりは寝巻き着てたわけだから、今はそのままの格好だ。
もちろん腕時計や携帯を所持しているわけではない。
家の中に道場がある古い武家屋敷のような家だったからか、俺の家では普段着が和服だった。
当然、寝巻きも浴衣である。
寝る前に布団に入った格好そのままで、何も持っていないどころか靴さえ履いてない。
起きぬけから何も食べていないままに歩き続けたせいか、異様に腹

が減ってきている。
さっきからぐーぐーと喚きたてる腹の虫。
……この様子だと体内時計、というか腹時計も狂ってるかもな。
体内の気を活性化させているために疲れは薄いものの、不快感はいなめない。
空腹やのどの渇き、現状の意味不明さからくるいらだちが募る。
あ〜、腹減った。
道端には野草が生えているが、食べる気に何かならない。
どうせ気を活性化させれば俺にとって毒なんてあってないようなものだ。
でも、食べてみようなんて気にはならない。
どうせなら肉が食いたい。そしてそれよりも水が飲みたい。
そして何より妹に会いたい。
一体、どうして俺がこんな目にあうのか。
何故我が妹君は、このような予知をしたのか。
正直、最近は俺の妹は未来が見えるんじゃなくて、妹が口にしたことが未来になるんじゃないかとも考えたりする。
これが秘密結社とか、どこぞの国の政府による誘拐とかなら楽なんだけどなぁ。
解りやすいし、何よりそうだったら相手をぶっ飛ばせばいいだけの話だし。
俺たち一家に政治的な話は一切関係ないしな。
もう、問題起こりすぎて日本政府からも半ば放置気味だし。
公安なんかにとっては、俺たちに関わらないようにするのは暗黙の了解らしいし？
でもなんかあった時に一方的に頼ってくるのは面倒くさいけど。
それでも、そういう仕事も主に爺さんか父さんがこなしてたらしいから、俺はやったことないんだけど。
これ、帰れるのかなぁ？

こうなった原因が不明な以上、帰れない可能性も……
もしかして、俺の日々の行いに対する天罰なんじゃ……でもそこまで悪いことしてないよな。
あれか？　昨日晩飯のおかずつまみ食いしたのか悪かったのか？
それとも一昨日、学園長のヅラ疑惑を証明してみせたのが悪かったのか？
それとも先週、妹のパンツをかぶって遊んでたのが悪かったのか？
それとも先月、妹あてに届けられたラブレターの送り主を血祭りにあげたことか？
……いや、あれは俺だけじゃなくて家族全員でヤッたから俺だけこの状態なのがおかしい。
じゃああれか、二か月前に俺を誘拐しようとしたアメリカの遺伝子研究所とかいうのをブッ壊したことか？
あれは向こうが悪いんだけど、やりすぎだって日本政府からも言われたしなぁ。
なんか一応、表向き重要な施設だったらしくて日米関係がちょっと悪化したらしいし。
それとも半年前、妹を誘拐しようとした北〇鮮のなんたらいうトップを殴り飛ばしたことか？
あの後日本にミサイ〇が飛んで来そうになったんだっけ。
いや、もしかしたら去年妹の風呂を偶然という名の必然的に覗いたことか？
それとも一昨年、父さん秘蔵のＡＶを父さんが出張中に家族で見たことか？
もしくは妹の寝ているところに忍び込んで寝顔写真をこっそり撮っていたことか？
もしくは妹の枕の中にこっそり俺の写真を忍ばせておいたことか？
それとも、妹の携帯の待ち受けを俺の写真に勝手に変えたことか？
まさか妹の体育の授業を隠し撮りしている奴を見つけて、ぼこった後のことか？

……撮られたビデオを廃棄せずに持ち帰ったのがいけなかったのかも。
だが考えても考えても俺がこの現状に陥った直接的な原因がわからない。

「んあ？」

不機嫌になりつつ歩いていると、前方から漂ってくる臭いに気がついた。
俺もよく知っている血の臭い。
そして、風に乗って距離が離れているせいか小さくはあるが、誰かが争うような声がかすかに聞こえた。
間違いない。この先に誰かいる。
誰かいるということはそいつは集落の方向を知っている可能性が高い。
もっと言えば、この世界で食べられる物を教えてもらえるかもしれない。
それどころか争っているのなら助ければ食い物を恵んでもらえるかもしれない。

「そうときまれば善は急げだ」

足の裏に気を収束させて爆発させる。
その推進力で一気に速度を上げてひた走る。
数秒と経過せずに俺はその争いの場へとたどり着いた。
そこで争っているのは大きめの馬車とそれを守っているおそらく護衛の人たち。
それと明らかに略奪目的な盗賊っぽいやつらだった。
俺はちゃんとした人間がいたことに安堵すると共に、その光景に注目した。

おお、ああいうまんま剣ですって武器使ってるところ初めて見たかも。
目の前の戦闘に目を奪われて、ちょっと思考がいらんところにいってしまった。
いや、だって剣や槍って映画や博物館で見たことはあっても実際に振り回してるところは初めてだし。
あ、この場合の剣って両刃の西洋剣のことだぜ？　日本刀じゃないぜ。
さすがに日本人で日本刀を見たこと無いなんて言わんよ。
お隣の吉井さんがいつも振り回してるの見てたしな。
でも、どっちにしても最近じゃ実践では剣なんてほとんど使われなくなったしな。
最近じゃ基本銃や小回りのきくナイフが主だろう。
まぁその中でも俺たち家族は素手という０レンジを選んでいたけど。

「ん、おお？」

しばらくぼけっとしていたからか、盗賊集団の一人が俺に斬りかかってきた。
とりあえず避ける。
周りの人間たちと比べて俺は浴衣という珍しい恰好をしている。
隠れているわけでもないので目立っただろう。
向こうにしても、よくわからんやつが突っ立っているしとりあえず斬っとけな流れだったのかもしれない。
明らかに盗賊側からしたら味方じゃないしな。

「おい、そこの男！
　巻き添えがいやだったらさっさと逃げろ！」

剣を持って戦っている護衛っぽい人が俺を見て叫ぶ。

護衛の人数と盗賊の人数では後者のほうが多い。
それでも無関係の俺に助けを求めるどころか、逃げろというあたり人がいいのだろう。
てか、ここにいるのは明らかに外人さんな人ばかりなのに言葉が通じるのか。
いやぁ日本語がお達者で。
言葉が通じるのなら何も心配はいらないな。
何を隠そう、俺の中学までの夢は世界から日本語以外の言葉を消すことだったからな。
もう英語を廃止して日本語を共通語にしたらいいじゃないか。
中〇語は嫌いだ、でも台湾人の発音はなんか可愛いから許す。
英語もあんまり好きじゃない。
フランス語？　フランス料理なら好きだよ？
韓〇語って何？　それって食べれるのって感じ。
閑話旧題。
とりあえず俺に逃げろと言ってくれた人と交渉してみよう。

「おらぁ！」

「せい」

「がふ！」

また俺に斬りかかってきた男の剣を回避して、顔面に拳をめり込ませる。
基本俺は自分からはあまり人に攻撃したりしない。
でも正当防衛は大好きだ。
そして誰かが不当に攻撃されている所に割って入って、攻撃側を虐めるのも大好きだ。
もっと言えば妹にいいよる虫を潰すのはさらに大大大大大好きだ。

ああ、我が妹よ。今頃俺がいなくてさびしんだりしていないだろうか？
もしかしたら俺がいなくなって喜んでるかもしれない……それはそれで可愛いからアリだな。
無感動が一番こたえる。

「よっこらせーの……どっこいしょー！」

顔面を殴った男の手を掴み、腰に手をあて背負い投げの要領で投げ飛ばす。
投げられた男は、そのまま盗賊連中の背中にぶち当たった。
その衝撃で武器を落としたり体勢を崩した隙をついて、護衛の男が攻撃する。
横振りの剣の動きで、一度に二人の盗賊の首が飛んだ。
おお、これはなかなか。
西洋剣はぶったたくことを主眼においているためか頑丈さはあるが切れ味はに本当には及ばない。
人体を切断するというのはこれでなかなかに技量を必要とするのだ。
あのおっちゃんけっこういい腕してるな。
俺は駆け寄って声をかけた。

「なぁなぁ、おっちゃん」

「なんだお前、逃げなかったのか？　死んでもしらんぞ」

「この程度じゃ死なねえよ。
それよかさ、苦労してるみたいだけどよかったら手を貸そうか？」

「手を貸すといってもお前は剣すら持っていないではないか」

おっちゃんは敵の攻撃を自分の剣で受け流しながらも、俺の言葉に怪訝な顔をする。
まぁ俺みたいなんがいきなりこの状況で声をかけてきただけでも怪しいだろう。
そのうえ手ぶらな俺が加勢するといっても信用できるかは疑問だ。
まぁ、そこは信頼はしなくても信用はしてほしいところだけど。
こっちを攻撃してこないぶん、敵とは思われていないみたいだしまだましか。

「死んだら死んだでそこは自己責任でいいからさ。
あの盗賊っぽいのを追い払えばいいんだろ？
手を貸すからさ、その代わりと言っちゃなんだけど食料と水わけてくんない？」

「食料と水か……これぱかりは依頼主に聞かねばわからん！」

目の前の敵を一人切り倒しながらおっちゃんが応える。
なるほど、そりゃ依頼主ってかこの馬車の持ち主に聞かなきゃわからんわな。
このおっちゃんたちは護衛に雇われただけみたいだし。
俺はぐりん、と首を後ろに回して馬車からこちらをこわごわと眺めている小太りのおっさんに尋ねた。

「なぁ、手伝ったら食料と水わけえてくんない？」

「わ、わかった……成功すればちゃんとわけてやろう」

うん。
話しのわかるいい人でよかった。
ではちゃっちゃと済ませて食い物もらおう。

いい加減腹減ったしな。いやぁ、これでようやく飯にありつける。
俺は大きく柏手を打った。
馬車を中心にあちこちで戦っている戦場にパアンと大きく音がなる。
掌に気を集めて、それを音に乗せて破裂させる感覚で柏手を打つと、
通常よりもいい音が出るのだ。
その音に一瞬皆が動きを止めてこちらに意識が向いた。

「一人目」

「がっ！？」

足元の気を爆発させる瞬歩で一人に近づき殴る。
ちゃんと殺さない程度に加減はしているが、それでもそれなりに力を入れている。

「二人目」

「うおわ！？」

殴った一人目を回し蹴りで蹴り飛ばす。
飛んだ先には別の盗賊。
巻き込まれるようにして吹っ飛んで行く。

「三人目」

俺の蹴りの後の硬直を狙って、槍で突いてきた盗賊の攻撃を腰をひねってかわす。
その捻りによって得られた回転の動きを利用して肘をそいつの側頭部に叩き込んだ。
男の槍を奪い取り、別の場所に投擲した。

「ぎゃああ！？」

「四人目」

投擲された矢は、別のところで護衛の若い兄ちゃんと戦っていた盗賊の足に突き刺さる。
護衛の兄ちゃんに今まさに切りかかろうとしていた男は地面に足を縫い付けられてもんどりをうった。
その隙に護衛の兄ちゃんに切り殺されて断末魔の叫びをあげる。

「うおおお！！」

槍を投擲すると、今度は斧をもった巨漢が俺に襲いかかってきた。
振り下ろされる斧を反身をずらして回避し、一歩相手に踏み込む。
相手の腕に手を添えて、反対の手で相手の肩を掴む。
そのまま斧を振り下ろした時の重心の移動を利用して、相手の体を縦に回転させた。
地面に仰向けに背中を叩きつけられる巨漢。

「五人目」

「げぇ！？」

その巨漢の隙だらけのどてっぱらに、瓦割の要領で拳を落とした。
蛙がつぶされるような声を出して血を吐く男。
まぁ、手加減してるから死にはしないだろう。

「「「……」」」

「さて、まだやる？」

流れるように瞬く間に五人をのした俺に、周囲が沈黙する。

「今だ、体勢を立て直せ！！」

おっちゃんの声に一足先に我に帰る護衛の人々。
相手が沈黙しているうちに彼等は体勢を立て直して馬車を囲んだ。
周りを見ても、けが人はいても死者はいないようだ。

「俺も腹減ってるからさぁ、あんまり長引かせたくないんだわ。
どっか行くなら見逃すけど、まだやるってんなら今度は手加減しないぜ？」

「引くぞ、撤退だ！！」

いきなり現れて場を乱す俺という不確定要素。
さらに護衛は体勢を立て直して陣形を守りに徹する形となった。
このままでは余計に被害が広がると判断したんだろう。
盗賊の一人が声を張り上げて撤退していく。
護衛に殺されたり、俺に気絶させられたものはその場に置き去りのまま去っていく盗賊たち。
……別に回収してくれても構わないんだけどなぁ。
ああ、でもこれで食い物がもらえるな。
盗賊たちに別れを告げるように、俺の腹の虫が音を立てた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2335y/

俺のことはお兄ちゃんと呼べ!!

2011年11月5日03時07分発行